

世界の創造 と 人間の罪

1. 天地の創造 (創世記 1,1-25)

- ☉ 聖書の目的は、世界が出来た過程や世界の構造について教えることではなく、世界の存在の意義とその目的を現すことです。
- ☉ 世界は無から神によって創造されたものです。
- ☉ 創造されたすべてのもの(被造物)は、神によって良いもの(善)として認められました。

「被造物は固有の善と価値とを備えています。創造主からまったく完成したのものとして造られたものではありません。神が定めた、これから到達しなければならない究極の完成に「向かう途上」にあるものとして造られました。」 **カトリク教会カテキズム 302**

- ☉ この完成は、神様が定めた世界の目的です。キリストは、それを「神の国」と呼びました。

問題

- 神がこの世界を良いものとして創造されたという聖書の教えを受け入れるために、私たちが毎日のように体験している苦しみや悪が、なぜこの世に存在しているかということを理解する必要があります。

2. 人間の創造 (創 1,26-31 ; 2,4-25)

2.1 人間は神にかたどって、神に似せて造られたものです。

- 知能、理性 (道具、計画、真、哲学)
- 自己を意識すること (自覚、自分を知る可能性)
- 自由意志 (選択の可能性、罪、悪、善、愛、責任、道徳、倫理)
- 不死(不滅)の魂 (霊魂、霊的次元、美、芸術、聖、宗教など)

2.2 人間の使命

📖 「神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」 創 1:28

📖 「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。」 創 2:15

- 人間が最初から与えられた仕事は、世界を完成させるための協力の象徴です。
- 神は人間から創造のわざの完成のための協力を求めています。

📖 「これが天地創造の由来である。主なる神が地と天を造られたとき、地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。また土を耕す人もいなかった。しかし、水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤した。主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらしあらゆる木を地に生えいさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいさせられた。」 創 2:4-9

📖 「主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」 創 2:16-17

- 神の愛と神への愛
 - 人間が持っているものすべては神からいただいたものです。
 - 神も人間から自由な贈り物を求めます（聖別）。
 - それは、相互の愛を表す贈り物の交換です。

📖 「主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」創 2,18

📖 「人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。「ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉。これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう／まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。」創 2,20-24

- 人間の相互愛（愛によって他人と結ばれ、愛の実践によって、一致へ向かいます。）
- 神を愛し、互いに愛し合うことによって人々は創造のわざの完成のための創造主と協力します。

2.3 人生の目的

📖 「イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。」エフェ 1:5-6

📖 「従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身でありキリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。」エフェ 2,19-21

📖 「すべてが御子に服従するとき、御子自身も、すべてを御自分に服従させてくださった方に服従されます。神がすべてにおいてすべてとなられるためです。」1 コリ 15:28

- 人間が神にかたどって創造されたのは、愛によって神と結ばれて、神の命にあずかるため、そして最終的に、神に対する人間の愛が完成されることによって神と一致するためです。神と一つになることこそ、人間の創造の目的であり、人間にとって最高の幸福の状態です。
- 目的を定めることによって、神様が善悪を決めました。この目的に人間を近づかせるのは善であり、遠ざけるのは悪です。

聖性の状態に置かれた人間は、神によって栄光のうちに完全に「神化される」はずでした。

(カトリック教会カテキズム 398)

3. 原罪（創 3,1-10）

- ➡ この物語は象徴的な形になっていますが、歴史的な事実を表しています。
- ➡ 蛇（悪魔）は神を人間の競争の相手として、また、幸福を妨げるものとして見せ、神が示した道と違う道が幸福へ導くと嘘をつきました。
- ➡ 人間（エバ）は、神の言葉を疑ったので、悪魔にだまされました。
(エデンの園の中で生まれたエバにとってエデンの豊かさは当然のものであったので、エバはエデンを神からの賜物として、また、神の愛の表現として認めることができず、神に関して感謝の心を持っていなかったゆえに、エデンの園が創られた前に何もない所での生活を体験したアダムよりも神の愛と神の善意を簡単に疑いました。)
- ➡ 悪魔の嘘を信じた人たちは、神が定めたと同じ目的を目指したが、神が示した道と違う道を選びました。
- ◎ エデンの園において人間のすべての必要性が満たされていたし、他の被造物と調和の内に生きていたので、肉体的な苦しみを知らなかったでしょう。

- ◎ 世界は、まだ、最終的な目的に達していなかったが、人間は、神との友情の關係に生きていたし、神が自分に最善を尽くしていると信じたので、その理想（期待、希望、目指している目標など）は、現実と一致していて、精神的な苦しみや靈的な苦しみも知りませんでした。
- ◎ 蛇が紹介した理想は、非現実的なものでしたが、人間は、それが可能であると思って、それを望むようになって初めて、現実と理想が一致しなくなったので、精神的な苦しみを味わいました。
- ◎ 人間が「善悪の知識の木」の実を取って食べたという物語は象徴的に、人間は神を無視して、何が善であるか、何が悪であるかということを決めることにしたという歴史的な事実を表しています。

4. 原罪の結果としての人間の苦しみと死（カインとアベル創 4,1-26; 洪水創 6,1-9,28; バベルの塔創 11,1-9）

・・・罪が二つの結果をもたらすことを理解する必要があります。大罪はわたしたちの神との交わりを断ち、その結果永遠のいのちを受けることを不可能にします。この状態は、罪の結果として生じる「永遠の苦しみ（罰）」と呼ばれます。他方、小罪も含めたすべての罪は被造物へのよこしまな愛着を起こさせます。人はこの愛着から、この世であるいは死後、清められなければなりません。死後の清めの状態は煉獄と呼ばれます。この清めによって、人は罪の結果として生じる「有限の苦しみ（罰）」といわれるものから解放されます。この二種類の苦しみ（罰）は、外部から神によって行われる一種の復讐ではなく、罪の本性そのものから生じるものと考えべきです。（カトリック教会カテキズム 1472）

- ◎ 悪霊との関係：敵意、悪霊がより簡単に人間に近づき、人間を攻撃するようになりました。
 - ☞ 「主なる神は、蛇に向かって言われた。「このようなことをしたお前は／あらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で／呪われるものとなった。お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に／わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き／お前は彼のかかとを砕く。」創 3,14-15
- ◎ 人間同士の関係：人間は、自分自身と他人の価値（尊厳）を知らないようになり、互いに愛し合い、協力する代わりに、争ったり、利用したりするようになりました。
 - ☞ 「神は女に向かって言われた。「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む。お前は男を求め／彼はお前を支配する。」創 3:16
- ◎ 自然（被造界）との関係：調和と正しい関係が破壊されました。人間は苦しむように、または死ぬようになりました。
 - ☞ 「神はアダムに向かって言われた。「お前は女の声に従い／取って食べるなど命じた木から食べた。お前のゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。お前に対して／土は茨とあざみを生えいでさせる／野の草を食べようとするお前に。お前は顔に汗を流してパンを得る／土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る。」創 3, 17-19
- ◎ 神との関係：神を知らないようになったので、神を恐れ、神から遠ざかるようになりました。
 - ☞ 「主なる神は言われた。「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた。こうしてアダムを追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた。」（創 3,22-24）

*

- ◆ イエスが語った「毒麦」のたとえは、悪の由来とそれに対する神の態度について語ります。

☞ 「イエスは、別のたとえを持ち出して言われた。「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた。人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。芽が出て、実ってみると、毒麦も現れた。僕たちが主人のところに来て言った。『だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか。』主人は、『敵の仕業だ』と言った。そこで、僕たちが、『では、行って抜き集めておきましょうか』と言うと、主人は言った。『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい」と、刈り取る者に言いつけよう。』マタ 13:24-30

- 自由意志を持っている人間が神に逆らったゆえに、この世に悪が入り込みました。悪をなくするために、人間が神に逆らうことができないように、その自由意志を奪いとればいいと考える人がいます。けれども、人間が自由意志を奪われたら、愛することもできなくなりますので、結果的に、神が定めた最終的な目的に達することができなくなります。
 - 罪の結果は、いやなことであっても、人間が間違った方法に向かっているということを示します。この結果がなくなれば、人間は正しい方向に向かっているかどうかは分からなくなるでしょう。神は、人間の罪の結果を取り消さないのは、初めに定められた世界の目的を諦めていないからです。
- 📖 「それはいったいどういうことか。彼らの中に不誠実な者たちがいたにせよ、その不誠実のせいで、神の誠実が無にされるとでもいうのですか。決してそうではない。人はすべて偽り者であるとしても、神は真実な方であるとすべきです。」 ロマ 3,3-4
- 人間は不誠実であっても、神はいつも誠実なのです。

5. 救いの計画

● 悪に打ち勝つ約束

📖 「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に／わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き／お前は彼のかかとを砕く。」 創 3:15

● 神は殺人のカインを守る

📖 「主はカインに言われた。「いや、それゆえカインを殺す者は、だれであれ七倍の復讐を受けるであろう。」主はカインに出会う者がだれも彼を撃つことのないように、カインにしるしを付けられた。」 創 4,15

● 神の祝福と契約

📖 「わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」神はノアに言われた。「これが、わたしと地上のすべて肉なるものとの間に立てた契約のしるしである。」 創 9,1-17

*

📖 「狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち／小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ／その子らは共に伏し／獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ／幼子は蝮の巣に手を入れる。わたしの聖なる山においては／何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように／大地は主を知る知識で満たされる。」 イザ 11:6-9

📖 「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないとわたしは思います。被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。」 ロマ 8:18-22

📖 「そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもの¹は過ぎ去ったからである。」すると、玉座に座っておられる方が、「見よ、わたしは万物を新しくする」と言い、また、「書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である」と言われた。 黙 21,3-5